千葉市感染症発生動向調査情報

2023年 第46週（11/13-11/19）の発生は？

1　定点報告対象疾患（五類感染症）

上段：患者数
下段：定点当たりの報告数

「定点当たりの報告数」とは
報告数/報告定点数

報告のあった定点数	定点	46週	45週	44週	43週
	小児科	18	18	18	18
	眼科	5	5	5	5
	*ｲﾝﾌﾙ/COVID	28	28	28	28
	基幹	1	1	1	1

*正式名称は
インフルエンザ/COVID-19定点

定点	感染症名	千葉市 注意報	千葉市 11/13-11/19 46週	千葉市 11/6-11/12 45週	千葉市 10/30-11/5 44週	千葉市 10/23-10/29 43週	千葉県 11/6-11/12 45週
小児科	RSウイルス感染症		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
	咽頭結膜熱	○	40 2.22	37 2.06	29 1.61	14 0.78	494 3.89
	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	○	97 5.39	92 5.11	77 4.28	65 3.61	583 4.59
	感染性胃腸炎	○	115 6.39	107 5.94	103 5.72	83 4.61	554 4.36
	水痘		1 0.06	4 0.22	1 0.06	1 0.06	10 0.08
	手足口病		17 0.94	14 0.78	15 0.83	11 0.61	108 0.85
	伝染性紅斑		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	1 0.01
	突発性発しん		7 0.39	5 0.28	2 0.11	5 0.28	27 0.21
	ヘルパンギーナ		4 0.22	2 0.11	2 0.11	1 0.06	8 0.06
	流行性耳下腺炎		2 0.11	1 0.06	0 0.00	1 0.06	5 0.04
*ｲﾝﾌﾙ/COVID	インフルエンザ（高病原性鳥ｲﾝﾌﾙｴﾝｻﾞを除く）	★○	428 15.29	355 12.68	468 16.71	478 17.07	3,728 18.27
	新型コロナウイルス感染症	↓	30 1.07	36 1.29	33 1.18	50 1.79	327 1.60
眼科	急性出血性結膜炎		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
	流行性角結膜炎		2 0.40	4 0.80	2 0.40	5 1.00	24 0.69
基幹	クラミジア肺炎（オウム病を除く）		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
	細菌性髄膜炎（髄膜炎菌性髄膜炎を除く）		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
	マイコプラズマ肺炎		0 0.00	1 1.00	0 0.00	0 0.00	2 0.22
	無菌性髄膜炎		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
	感染性胃腸炎（ロタウイルスに限る）		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00

★★：流行中　★：やや流行中　◎：増加　○：やや増加　→：変化なし　↓：やや減少　↓↓：減少

「流行中」 流行発生警報開始基準値以上
「やや流行中」 流行発生注意報基準値以上、又は流行発生警報開始基準値を下回った後に流行発生警報終息基準値以上

2　全数報告対象疾患：　9　例

病名	性	年齢層	診断（検査）方法	病名	性	年齢層	診断（検査）方法
結核	男性	30歳代	IGRA検査	腸管出血性大腸菌感染症	男性	10歳未満	病原体の分離・同定及びベロ毒素の確認
	女性	40歳代					
	女性	40歳代		劇症型溶血性レンサ球菌感染症	女性	60歳代	病原体の検出
	男性	50歳代	病原体等の検出				
	男性	50歳代	IGRA検査	梅毒	女性	20歳代	血清抗体の検出
	男性	60歳代		－	－	－	－

・第46週は、結核6例（101）、腸管出血性大腸菌感染症1例（27）、劇症型溶血性レンサ球菌感染症1例（7）、梅毒1例（65）の発生届があった。

※　（）内は2023年の累積件数。但し、累積件数は速報値であり、データが随時訂正されるため変化します。

定点当たり報告数　第46週のコメント

＜咽頭結膜熱＞

前週よりやや増加し2.22となり、過去10年中における最多を更新した。年齢階級別の報告数は3歳が最多。区別では、緑区（4.75）が流行発生警報開始基準値（3.00）を上回り最多で5歳の報告が最も多かった。他に稲毛区（3.00）が流行発生警報開始基準値と並んだ。

＜A群溶血性レンサ球菌咽頭炎＞

前週よりやや増加し5.39となり、過去10年中で最多を更新した。年齢階級別の報告数は5歳が最多。区別では、緑区（9.00）が流行発生警報開始基準値（8.00）を上回り最多で5歳の報告が最も多かった。他に稲毛区（8.33）が流行発生警報開始基準値を上回った。

＜感染性胃腸炎＞

前週よりやや増加し6.39となった。過去10年の同時期と比べると多めで、年齢階級別の報告数は2歳が最多。区別では、若葉区（15.00）からの報告が最多で2歳及び5歳の報告が最も多かった。

＜インフルエンザ＞

前週よりやや増加し15.29となった。流行発生注意報基準値（10.0）を上回ったままであり、過去10年の同時期と比べると最多のまま。年齢階級別の報告数は10-14歳が最多で、10歳未満では7歳及び8歳が最多。区別では、中央区（22.00）が流行発生注意報基準値を上回り最多で10-14歳の報告が最も多かった。他に緑区（21.20）、若葉区（17.75）及び美浜区（11.17）が流行発生注意報基準値を上回った。

＜新型コロナウイルス感染症＞

前週よりやや減少し1.07となった。年齢階級別の報告数は50歳代が最多。区別では、中央区（3.40）からの報告が最多で50歳代の報告が最も多かった。

■ 「過去10年との比較グラフ」及び「区別の発生グラフ」はWebSiteでご覧いただけます。

・ 過去10年との比較グラフ

https://www.city.chiba.jp/hokenfukushi/iryoeisei/khoken/kkagaku/idsc/documents/graph2023.pdf

・ 区別の発生グラフ

https://www.city.chiba.jp/hokenfukushi/iryoeisei/khoken/kkagaku/idsc/documents/graph_ward2023.pdf

■ トピック ■

＜A群溶血性レンサ球菌咽頭炎＞

2023年の全国レベルは、第39週から過去10年の同時期と比べて最多の状態で推移しており、第45週は前週より増加し3.34となりました。都道府県別では、鳥取県（6.47）が最も多く、次いで宮崎県（6.31）、山口県（5.70）の順となっています。関東地方は埼玉県（4.97）が最も多く、次いで千葉県（4.59）、東京都（4.45）の順となっています。

千葉市では、2020年第16週から定点当たりの報告数がほぼ1.00を下回った低い水準で推移していましたが、2023年第34週から1.00を上回る週が多くなり、第42週に3.50へ急増し過去10年の同時期と比べ最多となりました。その後も増加、第45週は5.11となり過去10年の最多を更新し、第46週は5.39と更に増加しました（図1）。

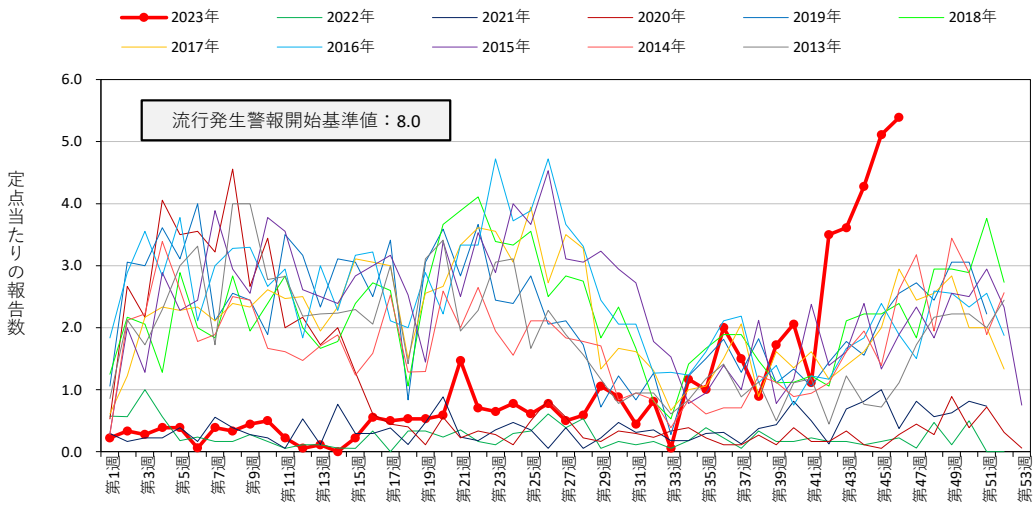

図1　定点当たりの報告数（2013年第1週-2023年第46週）

第1週から第46週までの定点医療機関からの報告数は、男性504例（57.3%）、女性376例（42.7%）の合計880例であり、年齢階級別では5歳（150例、17.0%）が最も多く、次いで6歳（132例、15.0%）、7歳（127例、14.4%）の順となっています（図2）。

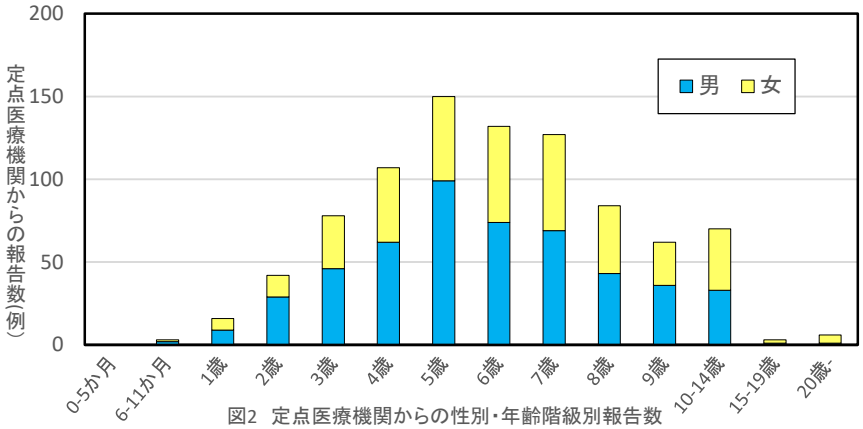

図2　定点医療機関からの性別・年齢階級別報告数
（2023年第1週-第46週 n=880）

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、A群溶血性レンサ球菌による上気道感染症です。

乳幼児では咽頭炎、年長児や成人では扁桃炎が現れ、発赤毒素に免疫のない人は猩紅熱といわれる全身症状を呈します。気管支炎を起こすことも多く、発しんを伴うこともあり、リウマチ熱や急性糸球体腎炎などの二次疾患を起こすこともあります。

いずれの年齢でも起こりますが、学童期の小児に最も多く、3歳以下や成人では典型的な臨床像を呈する症例は少ないとされています。国立感染症研究所によると、冬季および春から初夏にかけての2つの報告数のピークが認められています。

通常、患者との接触を介して伝播するため、ヒトとヒトとの接触の機会が増加するときに起こりやすく、家庭、学校などの集団での感染も多いとされています。感染性は急性期にもっとも強く、その後徐々に減弱します。急性期の感染率については兄弟での間が最も高率とされています。

予防としては、患者との濃厚接触をさけることが最も重要であり、うがい、手洗いなどの一般的な予防法も励行しましょう。